

川崎病発症時の気象医学的検討について

金沢医科大学小児科 浅井利夫
森田正人

〔はじめに〕

これまでの川崎病疫学調査結果によると、発生要因として何らかの微生物の感染の関与を示唆する知見が数多く報告され、内でも昭和54年、昭和57年の大流行、更に小地域での集中発生などが注目されている。そこで私共は、もし本症に微生物が関与するならば、先に述べたような事実があることより、好発気象条件があるのではないかと考え川崎病発症時の気象条件を検討してみたところ、興味ある成績が得られたので報告する。

〔対象及び方法〕

対象は昭和52年より昭和57年6月までに石川県下で発

症した川崎病患者 430 名である。方法は今回は、10日間に3人以上川崎病患者が発生した時を、とりあえず時間集積性有りとし、その時点前後の気象条件を金沢気象台発行の気象月報より調査し、De Rudder の時間 n 法の原理を応用して、発症日前後30日の平均気温、最高気温、最低気温、平均湿度の変化など7項目について検討を行った。

〔結果〕

石川県における川崎病患者発生状況は、昭和52年には29名発生、その後は年間47~52名発生しており、昭和54年の全国流行時には流行はみられなかったが、昭和57年

川崎病発症前後の気温・湿度の変化
—石川県で10日間に3例以上発生した時の気象状況—
(4月~10月発症例の平均値)

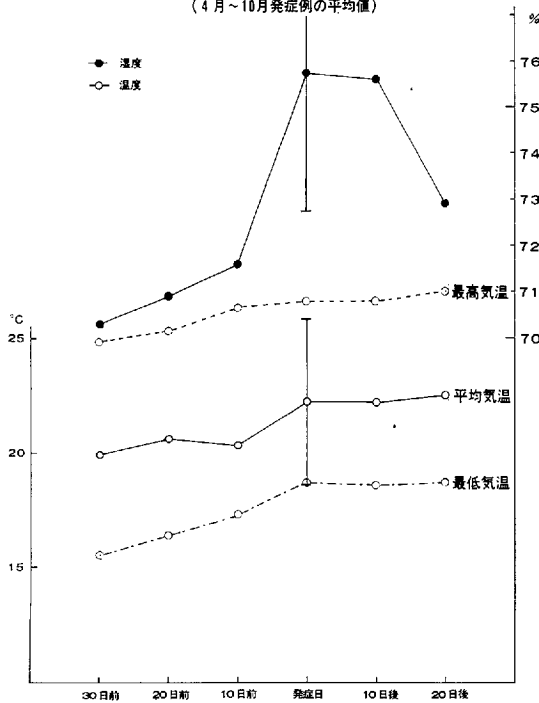


図 1

川崎病患児数と気象状況の変化(石川県内 昭和57年3月~6月)

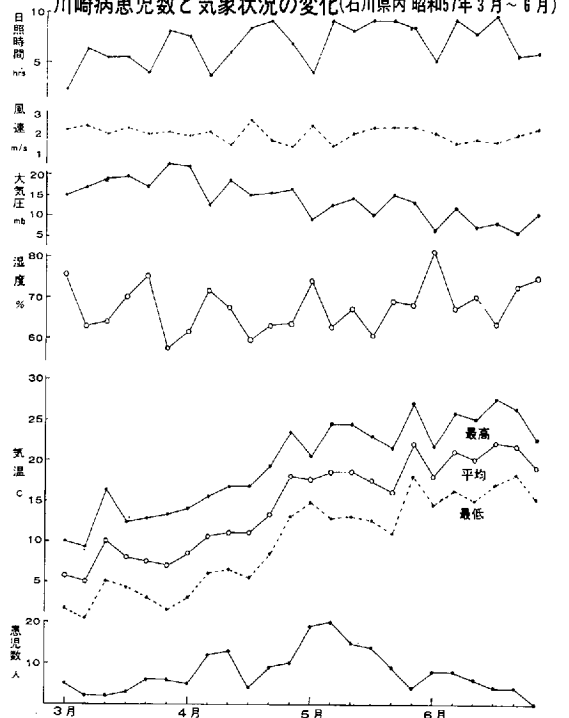


図 2

には1月から6月までの半年間に202名も発生し、全国流行に一致して流行が認められた。

昭和52年から56年までに川崎病が時間集積性を示した全ての時点での気象状況は平均気温 17°C 、最高気温 21°C 、最低気温 13°C 、平均湿度76%であった。しかし本症の好発年齢が4才以下ということより、患児の生活は室内が中心となることは云うまでもない。そこで室温と気温が比較的近いと考えられる4月~10月の例に限って検討してみたところ、発症前の平均気温は 20°C 、平均湿度71%、発症後の平均気温は 22°C 、平均湿度75%であった(図1)。一方、昭和57年の大流行時の気象条件を検討してみると、平均気温 17°C 、最高気温 22°C 、最低気温 12°C 、平均湿度67%であった。患者発生数と気象条件の相関を検討してみたところ、患者数が多くなる条件として平均気温 $17\sim 18^{\circ}\text{C}$ 、平均湿度65~70%、患

者が減少する条件として平均気温 22°C 以上、平均湿度60%以下ではないかと推定し得る結果を得た。平均気圧、平均風速、日照時間と患者数との間には一定の関係は認められなかった(図2)。昭和54年に流行が認められず昭和57年の大流行がみられたことより、この兩年の気象状況を比較してみると、昭和54年では平均気温は同期で 15°C と低く、平均湿度も60%以下が多く認められるなどの点が異なっていた。

〔結 論〕

川崎病が時間集積性を示した時点の石川県の気象状況を検討したところ、平均気温 $12\sim 22^{\circ}\text{C}$ 、平均湿度65~75%で川崎病が好発することが比較的多いように推定し得た。

今回は石川県内と限られた地区での検討であったが、今後全国的に検討してみる予定でいる。

川 崎 病 病 因 の 研 究

京都大学病理	濱	島	義	博
	池	原		進
	長	田	憲	和
	古	川	福	実
	河	野		厚
	関	田	憲	二
	井	上	秀	治
	中	村	敬	夫
	高		大	成
	清	水	城	司
	新	城	和	明
京都大学第3内科	藤	原	久	義
	星	野	恒	雄
山梨医大免疫	田	坂	捷	雄
	松	田	俊	二

1. 患児家塵ダニ体内の微小粒子の証明

われわれは最近62例の川崎病患児の家塵を集め、それ

よりダニを採取して、電子顕微鏡学的ならびに免疫組織学的検索を試みた。患者62例のうち、59例は川崎病典型



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



〔はじめに〕

これまでの川崎病疫学調査結果によると、発生要因として何らかの微生物の感染の関与を示唆する知見が数多く報告され、内でも昭和54年、昭和57年の大流行、更に小地域での集中発生などが注目されている。そこで私共は、もし本症に微生物が関与するならば、先に述べたような事実があることより、好発気象条件があるのではないかと考え川崎病発症時の気象条件を検討してみたところ、興味ある成績が得られたので報告する。